



## New Species of the Genus *Indotritia* from Central Japan (Acari: Oribatida)

Yoshiko HIRAUCHI<sup>1†</sup> and Jun-ichi AOKI<sup>2</sup>

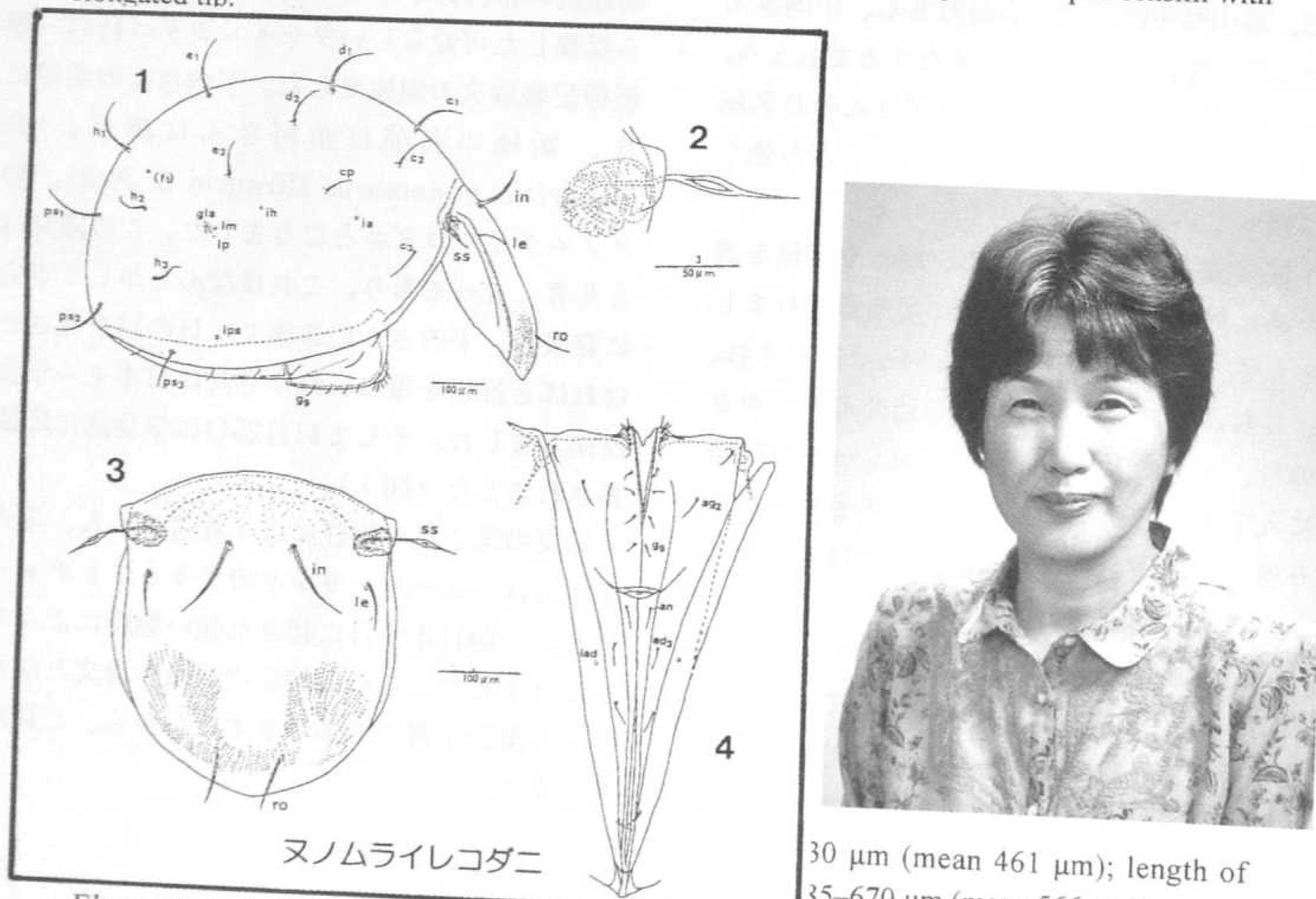
<sup>1</sup>Namerikawa High School, 45 Kashima-cho, Namerikawa City, Toyama, 936-8507 Japan

<sup>2</sup>3-8-12 Nishi-Azabu, Minato-ku, Tokyo, 106-0031 Japan

(Received 31 May 2011; Accepted 9 June 2011)

### ABSTRACT

A new oribatid mite of the family Oribotritiidae, *Indotritia nunomurai* sp. nov., is described from litter and soil layer of *Cryptomeria japonica* forests in Toyama Prefecture, Central Japan. The new species is readily distinguishable from the congeners by the spindle-shaped sensilli with elongated tip.



ヌノムライレコダニ

30 μm (mean 461 μm); length of  
 35–670 μm (mean 566 μm).

Elementary chaetotaxy. Body setae: ntg(14+14); g:(9+9); ag:(2+2); an (1+1, exceptionally

<sup>†</sup> One of the authors, Mrs. Yoshiko Hirauchi, was died in Christchurch in New Zealand suffered the heavy earthquake occurred in February, 2011. The present article become her last scientific paper.  
 DOI: 10.2300/acari.20.103

図1 ササラダニの一種の新種を記載した平内・青木の共著論文の第1頁と附図、平内さんの写真を合成したもの

## 土壤動物に魅せられた平内好子さん

新島 溪子

元 森林総合研究所

### Memory for late Ms. Yoshiko Hirauchi

Keiko Niijima

平内好子さんと知り合ったのは、私が土壤動物学会事務局の庶務を担当していたときである。1989年4月19日付けの手紙で、「ほんの2~3ヶ月前から土壤動物に興味をもち、高校の同級生の布村さんから紹介された」と書いてある。「学校と、家庭の仕事の合間をぬって……ですから、どこまでやれるものやら、全く自信がないのですが、まあ、退職まで約20年ありますから、少しずつでもやっていきたいと思います」と続いている。第12回日本土壤動物学会大会は栃木県立博物館で5月13-14日に行われた。その大会に参加された感想を平内さんは次のように書いている。「こんな楽しい会に仲間入りさせてもらえてよかったなあと思います。本当に“どろのむし”というものはゾクゾクするような魅力的なものです。」続いて11月16日付けの手紙では「今年の夏、思いきって三眼の実体顕微鏡と三眼の生物顕微鏡を買ったんです。夜、顕微鏡をみている私に向かって、中三の娘が『お母さん、良かったねえ、老後の楽しみがちゃんとみつかった！』と言ったんですよ。まさにその通りです」とある。12月には直接土壤動物の実習を受けたいとの申し出があり、翌年2月に3日間、茨城県つくば市の研究室に来ていただいた。大型土壤動物の調査と小型節足動物の抽出法、それにトビムシ類の分類・同定について新島が、ササラダニ類を専門家の福山氏が担当した。森林総合研究所では毎年複数の研修生を受け入れ、さまざまな講習や実習を行っているが、その中で、平内さんの熱心さは群を抜いていた。あらかじめ関連図書を読み、自分なりにいろいろ工夫して調査や観察を行っていたので、数多くの疑問や質問

をかかえていた。実習によってその一部が解決したようで、平内さんとの3日間は、受け入れ側にとっても充実したものだ。

その後の平内さんの活躍は眼を見張るものであった。最初に、富山県高等学校生物教育研究会編の「生物実験」の表紙にササラダニの写真を掲載し、次いで土壤動物検索図のイラストを全部カラー写真に置き換えて、さらにわかりやすいものにした。仲間に声を掛けて土壤動物調査を行い、1991年には「アルペンルート自然立山」の中に「落葉の下の世界」と題してカラー写真入りの調査結果を公表している。それらの印刷物が出版されるたびに、平内さんは、はじけるような喜びに満ちた声で「ねえ、見て、見て！こんなんができたんよ！」と報告してきた。平内さんの調査はさらに精度を増し、ダニやトビムシの種組成に言及するようになった。そしてついに、ササラダニの新種記載を行ったのである。

これら一連の活動が評価されて、2001年度の日本土壤動物学会研究奨励賞を受賞された。受賞が決まった時、平内さんは受け取るのを固辞された。理由は「私のような新参者にこのような賞を受け取る資格はない」とのことであった。評議員だった私は「研究奨励賞は業績というより、むしろこれからの活躍が望まれるという意味があるので、ぜひ期待に応えてほしい」とメールを送った。このとき以降、平内さんと私との交流が頻繁になった。私がキジャステ類の分布調査をしていると伝えると、平内さんは富山県内で採集したヤステ類を多数送って下さった。また、ブナの結実調査をしていた平内さんの研究仲間から、太平洋側の

平内好子さんが遺されたもの

布村 昇

Memory of late Yoshiko Hirauchi

Noboru Nunomura

本会会員として長年ご尽力いただいた平内好子さんがニュージーランドの震災でなくなりました。平内好子さんは富山県内では未開拓であったササラダニをはじめとする土壌動物を主な研究対象とされ富山県の生物相解明に大きく貢献し生物や理科教育の発展に尽くされました。一方、教育者として教え子たちの全人的成長にも大いに貢献されました。特に本会では5年にわたり副会長として、持ち前の快活さと卓抜した指導力により多くの会員に夢と希望を与え、会の発展に大きな貢献をされました。益々のご活躍が期待されていた矢先に平内さんを失ってしまいました。

平内さんは富山市にお生まれになり、富山高等学校、富山大学文理学部理学科、同理学専攻科(生物)を卒業され、昭和47年4月から福野高等学校平分校教諭を振り出しに泊中学校、魚津西部中学校、泊高等学校で教鞭を執られ、10年から、生涯学習校「新川みどり野高等学校」の新設準備に関わられ、12年から新川女子高等学校・新川みどり野高等学校教頭、県立滑川高等学校を経て平成17年から新川みどり野高等学校校長、そして滑川高等学校長をつとめられ、海洋高等学校と滑川高等学校による新「滑川高等学校」の開設準備にあたられました。

さて、平内好子さん(当時は堀好子さん)は高校時代の同級生でしたが、クラスの人気者で、クラスメートの信頼を集めていました。当時は物理学者志望で「湯川秀樹のような学者になりたい」と言っておられたことを覚えています。大学に進んで以後は交流がありませんでしたが、20年前「高等学校に戻ったので本格的に生物学の研究をしたいし、高校で教える以上、教師は研究者でな

くてはならない」と言い、「生徒に生命の多様性、生態、環境との関連を教えるのに身近で総合的で好都合なので土壌動物を選びたい」ということでテーマのことで相談にこられ、再会しました。テーマは中型土壌動物では種類も多く、今からのスタートでは大変だと思い、多足類はどうだろうかと返事し、土壌動物学会入会を勧めました。後者については土壌動物の第一線の研究者と親しく話ができることで、楽しみになり、勤務がかなり大変なのに毎年出席しておられました。テーマについてはしばらく考えられたようですが、「ササラダニをテーマにすることにした」と報告に来られました。研究が進んでいてかなりの種に名前がついていて、文献や指導者もあり、環境診断など多彩なアプローチが可能なおこと、たまたまササラダニを専門とする大西純さんが富山に勤務となったことも大きな要因と伺っています。当時勤務しておられた泊高等学校で土壌動物を研究・教育するシステムを築き上げられました。それが完成した矢先に別の高校に転勤になり、新たにシステムを作ることになりました。その間、本学会の他日本土壌動物学会、日本ダニ学会等の会員として活躍されました。とくに日本土壌動物学会には熱心に出席され、また学会員からの人気者でした。平内さんが出席されない時は、「なぜ欠席されたのか」と多くの人に聞かれたものです。

平内さんの土壌動物学研究

平内さんの土壌動物に関する研究をジャンルごとに分類すると次の5つになると思われます。ササラダニを研究し始めて、別刷りに番号を振るようになってからでも57を数え、それ以外のもの

ブナ林のデータがほしいとの依頼があり、森林総研の関係者を紹介したこともある。そんなやり取りの中で、お互い、虫だけでなく、花も大好きなことが判明した。富山大学の増田恭次郎先生は、東京都立大学生物学科の同級生で、立山花巡りには何回か参加している。次回はぜひ一緒に参加しましょうと言いながら、なかなか日程の調整がつかず、一緒に立山に登ることはできなかった。しかし、帰りに平内家に立ち寄り、採れたての野菜とおいしい料理をごちそうになり、のびのび育つ野菜や草花であふれた庭をながめ、つきることなくおしゃべりしたことは忘れられない。

立山といえば、私が駆け出しの頃、2番目に書いた報告が「北アルプス立山の高山帯における粘管目(トビムシ類)」(昆虫、34:339-346)である。1966年発行だから、45年も前になる。トビムシの魅力に取り付かれて、ぐいぐい土壌動物の泥沼に引き込まれていった当時の自分と、今、ササラダニに感動し、その魅力に取り付かれて、どんどん引き込まれていく平内さんの姿が重なって見えた。ササラダニにはステキな和名が付いていて、日本語の図鑑がある。一方、トビムシはほとんど和名がなく、日本語の図鑑もない。このままではトビムシ研究者は育たない。何とかしなければ、と、あせりを感じた。平内さんに刺激されて行った最初の行動は、トビムシ研究会を立ち上げることであった。幸い、多くの関係者の賛同と協力を得て、まず日本産トビムシ類に和名を付けることができた。私が言い出さなくても、いずれは必要になり、どなたかがまとめ役になられたとは思う。

でも、平内さんに出会ったおかげで、その時期を早める効果は大きかった。現在はトビムシの科別の解説を順次 Edaphologia (日本土壌動物学会の機関紙) に投稿し、全科揃った時点で図鑑として出版しようと計画している。出版されたら真先に平内さんに会って「ねえ、見て、見て! ついに日本語のトビムシ図鑑ができたのよ!」と報告するつもりだった。残念でならない。

平内さんからの手紙は、いつも便箋に手書きで、整った小さな字がいっぱい詰まっている。内容が豊富であり、時には観察データなどが含まれているので、大切に保管しておいた。また、毎年いただく賀状は、平内さんが、あふれんばかりの情熱と愛情を注いでいる対象を表現したものである。立山とチングルマ、調査地の有峰、愛犬のサクラとノン、そしてササラダニ……。添付したのはその中の一枚である。葬儀のとき、ご遺族に、追悼文として一部を公表したいと申し出たら、「どうぞ、どうぞ、何でも自由に使って下さい」と快諾していただいた。ニュージーランドで、安否不明のまま、ご遺体が確認できるまでの長い期間、つらい思いをされたはずなのに、気丈に、しっかり経過報告された娘さん。すばらしい跡継ぎを残されたと感じた。二人の親友の弔辞を聞きながら、平内さんを囲む方々は皆、私と同じように多くの刺激を受け、励まされていたことが、手に取るように伝わってきた。平内さんの体は無くなって、その志は関係者全員の心の中で生き続けるに違いない。

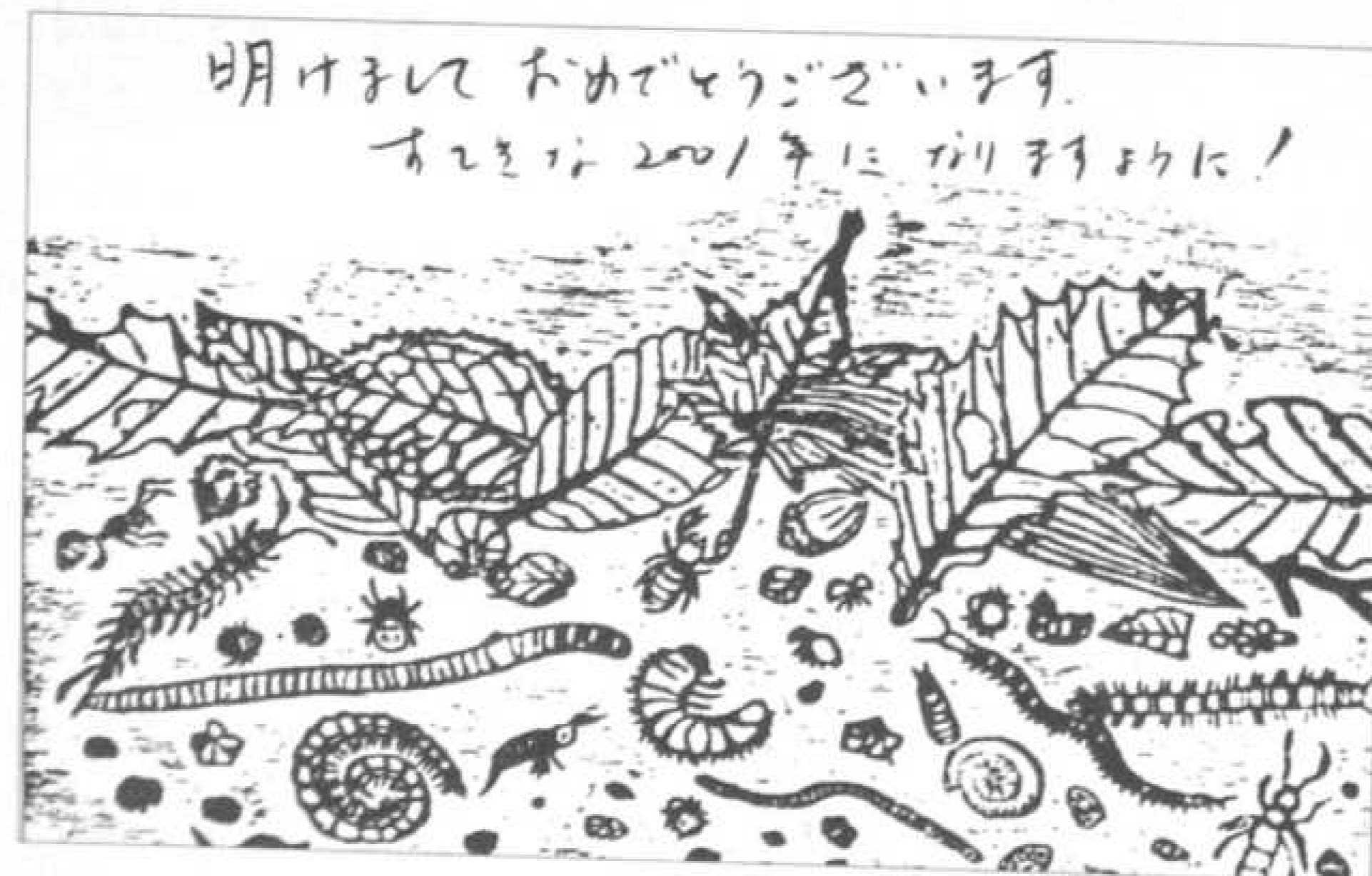


図1 平内好子さんからの絵はがき